

9-1		主題	軽費老人ホームでの防災・入居者同士の助け合いを育てる自治活動の取り組み	
心を動かす		副題	仲間と共に話し合った防災活動の報告	
研究期間	12ヶ月	事業所	至誠和光ホーム	
発表者：菊嶋 由美子（きくしま ゆみこ）		アドバイザー：		
共同研究者：				
電話	042-527-0034	メール	<a href="mailto:shisei-wakohome@shisei.or.jp">shisei-wakohome@shisei.or.jp</a>	
FAX	042-527-2646	URL		

今回発表の事業所やサービスの紹介	東京立川に昭和38年開設。経過的軽費老人ホームA型で定員50名の施設。入居者は基本的に自立した生活が出来る方だが、平成22年度末現在、入居し27年目97歳の認知症の方をはじめ平均年齢85.5歳（90歳以上が13名）。介護認定者は50名中22名（21名に認知症ある。）難聴者17名が共に生活している。介護職員4名で援助。運営方針は、「入居者同士の人間関係作り」と「健康づくり」である。			
------------------	---	--	--	--

<p>《研究前の状況と課題》</p> <p>それまでの防災訓練の状況          虚弱者は訓練の足手まといになるといけないう風潮があり「避難済み」の貼り紙をして居室で訓練の終わるのを待っていたため、常に7～8名の虚弱者が訓練に参加せず、全員避難が1回もできていなかった。虚弱者こそ避難をどうするかが本当の課題であった。特に夜間の職員体制は十分ではなく、入居者自身も不安だった。お互いに助け合って避難できる体制づくりが必要であったが、全く手つかずの状態であった。          どこで火災が発生しても避難する方法が一辺倒であり、自分達で考えて判断する避難体制が確立できていなかった。          以上のことから、あるべき防災の姿と実際の状況          のズレを実感し「おざなり」とであると強く問題意識を抱えていた。</p>
--

<p>《研究の目標と期待する成果》</p> <p>「誰でも安心して暮らせる和光」をスローガンとして、入居者同士がお互い助け合い自らが考え判断することができる防災訓練を目指して毎月話し合いが行われた。そして防災への意識を高めながら、全員避難が達成できる事を目標とした。そのために入居者自身で作る自治活動が活発になり、話し合いの中から問題点に気づき、それを1つずつ解決してゆく事を着実にすすめた。最終的には一番大きな課題として、入居者同士がお互いの信頼関係を育てる必要がある、という認識につながった。</p>
--

### 《具体的な取り組みの内容》

入居者の気持ちに配慮する形で、4月から毎月1回任意参加の『防災を考える会』が立ち上がった。職員が司会役となり自由な意見交換で問題点を話し合ってきた。1回の平均参加人数は、50名中26.2名であった。話し合いの中から7つの取り組み項目が生まれ、1つ1つ話し合いの上解決を図っていった。

- ① 避難済みをなくしたい
- ② 耳の遠い方にどう伝えたら良いか仕組みを考えた
- ③ いろいろな非常階段を使い、自ら考える避難を実行した
- ④ 外出する時は幹事さんに告げていく必要がある
- ⑤ 避難後の合図を統一する
- ⑥ 消火スプレー缶を使って訓練したい
- ⑦ 緊急時、部屋に鍵をかけていると知らせる事が出来ない

### 《取り組みの結果と評価》

最後に部屋にカギをかけない、と言う事は仲間を信頼すること。そして『信頼する』ことは直ぐにできるものではなく、入居者同士の理解のプロセスから生まれる。一方、10ヶ月の間に全員避難が2回達成できた。ゆっくりであれば、ほとんどの方が避難できる事も分かり、入居者同士の安心へとつながった。

### 《まとめ》

現在も『防災を考える会』は継続して毎月話し合いを積み重ねており、結果を出している。やはり自分達の生活は自分達で築く、という入居者自身の生活づくりの基本が大切であることが再確認できた。それは防災への入居者の強い思いが人の心を動かし、全体に通じた結果であった。

### 《参考文献》

### 《提案と発信》

自らの生活づくりを自治会を通じて主体的に取り組む事。それは、仲間の助け合いの気持ちを育て人間関係づくりの基本となる。施設運営の重要な部分である。

### 【メモ欄】